

三十八 繩を解かれた鵜の空想 — 鵜飼と稲作の伝来

プロローグ

去年の十一月の下旬、しぐれ上がり、家の裏手の内海沿いの道を散策した。湿った空気が漂って、干拓地がある奥の方まで細かいさざ波が広がるのを眺めると、向こうの海面に大きな絵柄がある。ちょうど尾形光琳の紅白梅図屏風の真ん中を流れる水流のようだ。その絵柄はしかし流れてはいず、波もなくなめらかで、輪郭の構図だけが似ている。色彩の鮮やかな光琳の絵とはちがって、薄墨で描かれた夕暮れの山水図。その図中の空を一羽の黒い鳥が飛んで行く。翼の前の首が長いから鴉ではなく鵜だ。遠くへ飛んで行く鵜を見て、わたしの想念が繩を解かれた鵜のように気ままに浮遊し始めた。

一 著書『鵜飼』の導き

浮遊は、数年前中国に滞在していたときのことを思い出して始まった。上海から紹興へ遊覧に出かけたおり、杭州の西湖ほど有名ではないけれど東の紹興の東湖で、来観者のための鵜飼を観たのである。初めて目にしたわたしは、鵜飼もまた広大な中国のどこかでそ

んな奇想天外な漁法を発明した人が出たのだろうと思った。紹興の東の寧波付近で六千年以上も昔の水稲栽培の痕跡が発見されたことをむすびつけて、漠然と、鵜飼は稲作といっしょにこのあたりから日本列島に伝わったのだろうかと考えた。そして今度日本の海辺で観た「冬暮鵜翔山水図」が、その思索の再開を促したのである。

浦の苦屋に住む老人には、インターネットで調べて考えるしか方法がない。世の中には奇特な人がいるから、鵜飼についてさまざまな情報が電子情報網上にある。だが、ウィキペディア「鵜飼い」(三)が基礎的な知識を与えてくれるものの、鵜飼の起源を論じてわたしの関心に答えるものは少ない。そこで、しっかりした書物として半世紀前に書かれた可児弘明著『鵜飼』(四)で予習することにする。新刊は手に入らないので、中古本をとりよせた。著者は、先達の文献を涉獵し資料をヨーロッパにまで求めている。また、鵜飼の現地を訪ねて鵜匠に話を聞き、実際の鵜飼を観察して、民俗学的に研究している。この著書は、それ以後このようにまとまった研究が書物として出版されていないようだから、鵜飼について最も網羅的に記述した書物ということになる。電子情報網の諸記事も、一、二、三の新しき情報をのぞけば、基本的にこの著書の与えた蓋然的な結論を越え出るものはない。この先学の結論を変えるほどの材料はないのかもしれない。けれども、関連する事象を巡って浮遊すれば議論を緻密にできるかもしれないし、そうでなくても楽しめるだろう。

鵜飼と稲作とをひとつながりのものとするアイディアは、すでに可児著『鵜飼』にある。

鵜飼の風習は、中国南部を中心としてヴェトナム・インドに及び、台湾・沖縄・朝鮮にかけて日本にある。ところが、日本の鵜飼が海鵜を使い縄で制御しているのところが、中国では川鵜を繁殖させ縄でつながずに魚をとらせる上に、日本と中国が海で遠く隔てられているので、独立に鵜飼をするようになったと考える人がいる。しかし可児は、渡り鳥の海鵜が日本で産卵することはまずなくてヒナからの飼育ができないことと、日本にも縄でつながず鵜飼をすることがあったことなどを挙げて、日中のちがいは本来的なことではないとする。それよりも、多大な熟練を要する鵜飼の技はそうたやすく独立に発生するものではないと考える。

稲の伝播の方向が中国大陸から日本列島へということとは疑いようがない。一九六〇年代にはまだイネがインド原産と考えられていたが、インドのイネが「インド型」なのに、日本と中国江南で「日本型」の一系統が栽培されており、イネが栽培条件の悪い朝鮮半島を経由して日本に伝わったと考えにくいことから、可児は稲が江南から日本に伝播した蓋然性が高いとする。その上で、中国南方の水郷地帯の水稲耕作と鵜飼とを複合的な生活文化すなわち「文化複合」と規定し、二つがセットで日本にもたらされたと推定する。つま

り、鶉飼は中国から日本に伝来したというのが著書『鶉飼』の結論である。

この主題をさらに考察するには、問題の性質上、始終実証的に議論することは困難だけれども、可能なかぎり合理的な推論を進める必要がある。

二 水稲の来歴

世界電子情報網には、イネの品種に関する知見を加えて、日本列島への水稲の伝播を鶉飼とむすびつけた議論が見られるが、それは、可児著『鶉飼』の基本論点を越えず、鶉飼が中国からの伝来とする可児説を、日本列島の水稲耕作が朝鮮半島を経由せず中国から来たと主張するために援用するものである。その議論は必ずしも十分ではないとわたしには思われる。まず、水稲の伝播についての最新の知見を整理しておこう。

電子情報網上でかなり信頼できるウィキペディアの「稲作」⁽³⁾によれば、

一、中国で最古の水田遺構は、およそ紀元前六千ころのもので、長江流域で発見されている。長江下流域の寧波郊外の河姆渡では、紀元前四千五百年—五千年の水稲栽培の

痕跡が見つかっている。日本列島への伝播のルートと年代については、さまざまの説が並記されて記述はよく整理されていない。しかし最近、土器に付着した炭化物の放射性炭素(14)含有率による年代測定が、日本列島で水田稲作の始まった弥生時代の開始時期を絶対年代で明らかにした。それによれば、弥生時代は従来の想定よりも五〇〇年もさかのぼって、最も古い水田が見つかる早期は紀元前九〇〇年代、九州北部で水稲栽培が広く行なわれ始めた初期は紀元前八〇〇年前後の開始と考えられる(4)(5)。

二、イネの品種についても科学的なデータがある。東アジアで栽培される温帯ジャポニカ種は、DNA(部分)の解析により八種類に分類されるが、日本にはRM1型のaからcまでの三種があり、最も多いRM1b型は西日本を中心に分布し、RM1a型は東北も含めた全域に分布している。中国にはRM1型のaからhまでの八種全部がそろい、RM1b型が最も多くRM1a型がそれに次ぐという。朝鮮半島にはRM1b型をのぞく七種があり、RM1a型が最も多い。

イネの品種から考えてみよう。分布状況は、RM1b型が温暖な気候に適し、RM1a型は低温に少し耐性を持ち、RM1型のdからhはもっと寒冷に強いことを示唆する。さて、DNA型の分岐は栽培の年数が経過するにつれて生じたはずだが、水稲耕作が中国の

南から北上したことを考慮に加えれば、栽培地域が北上するにつれて低温に強い品種が生じた可能性もある。中国と日本にRM1b型とRM1a型が存在することは、日本への伝来の前に遺伝子の分岐が生じていたことを示す。その分岐は、年数経過によって同じ栽培地域で生じたとも異なる栽培地域で生じたとも考えられる。日本列島へは、RM1b型だけを栽培していた地域、もしくはRM1b型とRM1a型の混在していた地域、あるいはRM1a型だけを栽培していた地域からの伝播が考えられる。いずれにせよ、朝鮮半島には片方のRM1a型しかないのだから、日本列島への伝播の主流は中国からの直接流入だったことになる。

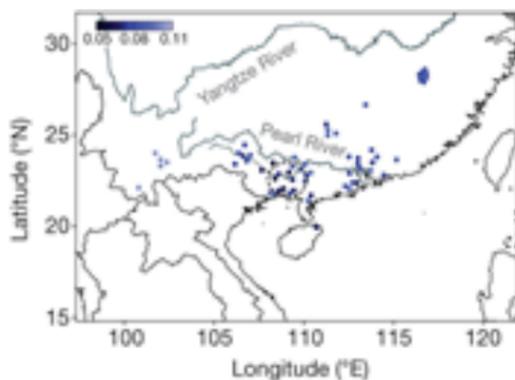
海を隔てた列島には中国大陸の沿海地域から伝播したはずである。ここで注目してよいのは、長江下流域地域で最も古く六千年以上も前の水田耕作遺物が見つかったのが、先述のように杭州湾南の寧波付近ということである。ウィキペディア「稲作」は、イネの分類の典拠を挙げていないので、RM1a型とRM1b型のどちらが祖型か知りようがないが、もし仮に低温に耐性の強いRM1a型が北に偏っていたとすれば、水稻品種の地域分布は、東シナ海と黄海をはさむ、日本列島—朝鮮半島の中国大陸東岸との地理的対向によって合理的に理解することが可能である。すると、日本へ伝来したモミの有力な原産候補地を、長江下流域一帯から始めて必要ならその南北に探すがよいだろう。

電子情報網上には、朝鮮半島から日本列島に水稲が伝播しなかったと主張する記述があるが、それは論理上排除できない。朝鮮半島での水稲耕作がこれまで推定されてきたように日本列島よりも早くから行なわれていたとすれば、半島から九州への流れもあったと考えるべきだろう。文献②には、朝鮮半島南部の遺跡の土器付着物についても同様の放射性炭素による年代測定が示されているが、半島と列島の無文土器の年代を科学的な年代測定で比較検討し、また、水稲耕作の開始年代を科学的に比較検討することもいまだ完了していないように見える。電子情報網上で、論者が自国や研究対象の遺跡をより古い場所としたい傾向が見え隠れするけれども、それは、真実を知ろうとする普遍的な人間の姿勢ではない。出土するモミの遺伝子解析や放射性炭素による年代測定などの科学的な研究が進展することを期待したい。

それにしても、一九六〇年代に日本列島の水稲は江南から伝来したという考えもあったのに、日本古代史と考古学の研究者は、二十世紀の末まで固定観念を離れることができなかった。縄文文化が東高西低で西日本に目立つ遺跡が少なめとしたまま、図式的な年代区分を想定し、紀元前三百年代から稲作が始まったとして、弥生文化の広がり方が急速すぎること疑問を抱かなかつたのは不幸なことだった。紀元前十世紀ころ水稲が伝来したと

いう新しい知見に立てば、海を隔てた列島で、水稲栽培を基幹とする生活体系は年数をかけて普及したという無理のない解釈が得られる。

特筆すべきことは、電子情報網上に、ウィキペディア「稲作」よりも新しい科学的な知見が見つかることである。すなわち、二〇一二年、中国の研究者と倉田のり・久保貴彦ほか^⑤が、イネのゲノム全域の変異を解析して、栽培化が中国広西地区の珠江中流域(下図)で始まったと結論している。この研究成果によって、従来の中国雲南省や長江流域を水稲栽培種の起源地とする想定は否定される。長江流域の水稲は南から北上してきたのである。水稲栽培が各地にどのような経路で伝播したかの全体像は、新たに構成しなおさなければならぬ。ゲノム解析の研究が進めば、日本列島への経路も含めて、全体像がもっと明確になるだろう。



Nature, 490, 497-501(2012)

ともかく、朝鮮半島にない R M I b 型の方が多く日本列島へは、水稻を直接中国からもたらした流れがあったことは確実である。

三 鵜飼の発明

この思索のもう一つの主題である鵜飼は、古代人の生活体系の中の一つの食糧調達手段として考察しなければいけない。そうするとやはり、可児著『鵜飼』の説く「文化複合」が重要な概念として浮上する。鵜のように沈潜して思索を深めてみよう。

鵜が水に潜り魚を捕るのを眺め、飼いならして人のために魚を捕らせるまで至るには、心理的にも技術的にも道のりは遠い。採集行動のなかで野生の鳥とその卵を食べることから、その鳥を飼って卵を産ませ肉も食べることを思いつくよりもはるかにハードルが高い。日本と中国とで鵜飼が独立に創始された確率は低いだろう。それに比べれば、まずどこかでカワウを飼ってニワトリのように家禽化が始まった可能性が高い。著書『鵜飼』によれば、魚を食うカワウの肉は食用に向かないということだが、食糧事情の苦しい古代ならそんなことは言っておれない。カワウは子を産ませて継続的に飼うことができる。飛べない

ようにして住居近くの水辺で飼えばエサは自分で捕る。ここで、鳥類は卵からヒナになっても成鳥になるまで親が育てることが重要だ。ヒナは親になつき、ほかの動物にもなつきやすい。ウはコロニーをつくる鳥でヒトが飼いならしやすいのである。ニワトリと同じく集団のなかで序列をつくるらしい。さて、飼っている鵜が魚を捕っている場で、人が首をなでてやると魚を吐き出すできごとが起きれば、人のために魚を捕らせる鵜飼が始まる。

しかし、共同生活をしている大小の家族が、いつも腹をすかせて食べ物を探しまわっていた時代に、鵜を飼育し、さらに訓練して魚を捕らせるまでの手間をかけるのはむずかしい。かつかつでも食べていけるゆとりができてはじめて鵜飼を発明することができただろう。東アジアの長江以南で、食を安定させるのに稲の栽培以上のものはなかった。

人に最も身近な鳥ニワトリの祖先はかつて東南アジアに住み、東南アジアや中国大陸南部で家禽化が始まったとされる⁽³⁾。ところで、新たに稲の栽培開始地域と特定された中国広西チワン族自治区の珠江中流域はどこにあるだろうか。上に引用した図によれば、そこは、広東省で西江と呼ばれ河口が広州にある川の上流である。ヴェトナムに近い。ニワトリを最初に飼いだめた地域に含まれるだろう。稲作を始めた古代人が、ニワトリも飼っていて、カワウも飼ってみようという気を起こすことはありうることである。すると、著書

『鵜飼』に、清代の絵を挿入して、広東省では竹を組んだ筏に乗って鵜飼をすると紹介されていたことが思い出される。この符合は偶然以上のもので、「稲作と鵜飼の文化複合は中国南方の土着文化で起きたのではないか」という可児弘明の推定は、まさしく慧眼だったのかもしれない。定住場所の近くで鵜飼をするとすぐに魚影が減るだろう。魚を捕り続けようとするなら、手っとり早く筏を組んで周辺に向かう必要がある。数本の竹を組んだ素朴な筏を使う鵜飼の図は鵜飼発祥の真相を描いている、とわたしは思う。

水稲栽培の始まった珠江水系で鵜飼が発明されたとすれば、そこを中心に伝播した初期の水稲栽培地域の地図に鵜飼の分布地図が重なることをよく説明できる。鵜飼が水稲栽培に伴って伝播したという考えを支持するだろう。鵜は世界中に連れて行くことができたが、鵜飼は十分な淡水系をもつ水田耕作地域の外にまで広まらなかった。ところで、考古学は、水稲栽培が長江流域に達すると、川・湖・沼・沢の広がる広大な平原で大きく発展したことを教える。鵜飼は長江流域の広大な水系でたいへん有効な食糧調達法の一つになっただろう。どこで鵜飼が発明されたとしても、後世鵜飼が行なわれたその最良の条件をもつ水郷地帯で、稲作文化の発展した古い時代から鵜飼があったと考えてよいだろう。紀元前一千年以前の長江流域に、稲作民で鵜飼をする人々がいたと想定できる。

四 鶯飼と稲作を日本列島へもたらした移住者たち

中国大陸から日本列島へ渡った人たちのことを考えようとしている。この移住は、どこから日本列島に来たか具体的な伝承などが残っていないので、古代ギリシアの人々が小アジアやイタリアへ移民したような組織的なものではなかったのだろう。ここまでの思索と同じく、歴史や状況証拠を参考しながら考察を進めるほかない。

まず、中国大陸東方の海流を見てみよう。科学的なデータが国土地理院のアーカイブ②から得られる。東シナ海の海表面の流れは黒潮ほど一定せず季節によって変化する。夏期、中国大陸沿岸で、長江河口よりも北では南流し、杭州湾から長江河口付近まで北向きの流れがある。浙江省の南部以南で、沿岸の流れは必ずしも一定向きでないが、大陸から離れると北東への流れになる。そして、長江河口域と杭州湾の東方では東北東への流れが支配的である。つまり、台湾以北―長江河口の沿岸から東の東シナ海へ乗り出せば、長江河口域―杭州湾の東方の東北東への流れに乗ることができる。さらに東をめざし、対馬海流にうまく乗ることができれば、九州の西岸と北岸、さらに本州西岸に達することができそうだ。帆を使っていたらうから、それは可能である。長江河口域か杭州湾から出発すれば

最短の航海になる。古来日本との往来の主要な港が杭州湾南岸の寧波だった理由はここにあるだろう。最澄と空海が加わった遣唐使船団もここに向かった。使節も空海も北の長安へ行ったのにそうだった。こうして、中国大陸から日本列島へ渡るのに、長江河口域—杭州湾—から出発するのが最も有利だったことになる。

長江中下流域はみなそうだが、古代、蘇州から上海・杭州・紹興・寧波までの沿海地域は、川や水路でつながる沼沢が見渡すかぎり広がる文字どおり豊葦原の国であった。有名な二人の王夫差と勾踐を出した呉(都は蘇州)と越(都は紹興)はこの地域に興った。紀元前五世紀前半の夫差と勾踐は春秋五覇に数えられることがあるほどだから、黄河流域の最先進諸国に迫るほど発展していたのである。呉も越も紀元前六〇〇年ころには国の形態をなしていたようだし、夏王朝の初代禹の伝説に出る会稽山は紹興にあり、伝承では呉の建国は周の時代よりも古い。事実、ここ江東地域(長江下流域南岸一帯)で多くの遺跡が発掘され、良渚文化(紀元前三千年—紀元前二千年)と呼ばれる水稲栽培文明が栄えたことが明らかになっている。その時代から千年以上もあとの紀元前一千年ころは、呉・越興隆の前段階にあったのである。このことと前段階の海流のことを考え合わせれば、日本列島へ渡って水田稲作文化を定着させた人々が、江東沿海部の稲作民であった蓋然性が最も高い。

ここで、イネの生育を気候とむすびつけて考えてみよう。中国の江東地域が梅雨のころ、天気図上で弧を描く梅雨前線は日本列島西部にまで伸びている。日本列島西南部は、江東よりも北にあるが、水稲の生育期間の天候は江東に似ているのである。五月から十月までの福岡と寧波の平均の最高・最低気温はおおよそ等しい。つまり、江東からモミと農具をたずさえて無事に九州に上陸した人々は、水稲生育上の大きな困難に出会わなかったと考えてよい。それと対照的なのは日本列島東北部である。稲は日本海沿いに早い時期に東北地方に到達したようだが、冷害のせいで米の収穫量が安定してある程度十分になるまでに長い年月を要したことはよく知られている。酒田や福島の夏期の平均最高・最低気温は、福岡よりも二、三度低い。第二節で見たように東北地方まで分布するのはRM1a型のイネの方だから、RM1a型が低温に対する耐性をより獲得しやすかったことになる。

第二節で議論したときすでにこの判断をとりいれているのだが、長江北方の沿海部にある塩城の夏期の平均最高・最低気温は寧波よりも二度近く低いので、長江を越えて北上した水稲の普及は年月を要したと類推される。水稲栽培種の発祥地珠江中流域の南寧と河口の広州の平均最高気温と平均最低気温は寧波よりも高めで、六月と九月に三度余り高い。そこから海沿いに北上すると、福建省福州で平均最低気温が低めとなり(六月と九月に下

がる、浙江省南部の温州に至ると、その傾向が増し夏期の気温はおおよそ寧波に近い。したがって、珠江中流域で水稲栽培が始まって江東地域に普及するまでも、気候の相違を克服するのにある程度の年月がかかったと考えられる。蛇足を恐れずに言えば、水稲種のRM1a型とRM1b型との分岐は、自然環境への適応の過程で起きた可能性がある。朝鮮半島にRM1b型がなくRM1a型しか現存しない状況は、上述の性質に関係していると考えられる。釜山の夏期の平均最高・最低気温は、福岡よりもおおむね二度余り低い。江東から東シナ海に乗り出せば、対馬海流と黄海への分流に乗って、朝鮮半島の南部に上陸した人々もあつただろう。その場合、RM1a型とRM1b型の両種をもちこんだとしても、低温に対し耐性を秘めた前者が後者を駆逐したのだろうか。あるいは、中国大陸で北上しながら低温になれたRM1a型が黄海を渡ったとも考えられる。従来、日本列島の水稲はこのルートを経由して九州に伝来したという見方が主流だったのである。それがどの程度の規模だったかを考えるには、やはり、海峡の北岸と南岸の水田遺跡の年代測定などの研究が進むのを俟たなければならぬだろう。ただ、低温になれたRM1a型が朝鮮半島経由で来たものなら、九州への南下は減収にならなかつたのか、また日本列島の北上は逆に容易ではなかつたのか、少し首をかしげたくなる。補足すれば、那覇の夏期の気温は広州に近いので、古代沖繩で栽培された水稲が来たとしても不利だったろう。

いずれにせよ、日本列島での水田耕作は九州北部で始まった。そして、水稲生育期間、福岡の気温は江東沿海部の気温に近く、雨量も似ていて梅雨時に多く十月に少ない。水稲伝来の経路に関して重要な生育条件においても、ほかのどこからよりも江東沿海部の稲作民がモミを九州北部に持ちこめば、栽培に成功することが約束されていたのである。

さて、長江以南の諸民族は、華北の「漢民族」から百越と呼ばれたのだが、華北の人々に身近な越がその代表名とされたのだろう。中国大陸南端で水稲栽培を始めた人々はモミをたずさえて長い年月をかけて広域に広がり、北上した集団は長江にまで達したと推測できる。それらの人々を北方の人々が百越と呼んだのである。両者の言葉は通じなかった。ところで、新たに水稲栽培種の発祥地とされた広西チワン族自治区の原住民は、チワン族と呼ばれる。長江以南の人々の大多数が漢化されて漢族と登録する現代でも、チワン族は周辺の省を含めると千八百万人いるという^⑤。楚が春秋戦国時代に版図を南に広げる以前の江南には、チワン族につながる民族系統の人々が住んでいた可能性が高い。杭州湾南岸の越と長江南岸の呉の住民は、鶻飼の文化ももつその民族系統に属していただろう。

中国大陸の人々は、東方の朝鮮半島のことをずっと古くから知っていたにちがいない。半島と九州との往来もまた古く、長い年月のあいだには、大陸から日本列島への漂流者・

移住者などがあり、逆に、島国から大陸へ渡った海人もあつただろう。紀元前十世紀の中
国大陸の人々が日本列島のことを知っていたのは確実だ。実際、後漢の江東人の書いた古
書『論衡』に、紀元前一千年ころの周に倭人が朝貢したという記事があるそうだ。

ここまでの議論から、モミをたずさえた九州島への移住成功者は江東からが最も多かっ
たと考えることができる。どういふ人たちがどういふ理由で海に乗り出したか詮索するゆ
とりはないが、その人々は、東方の新天地へ移住しようとしたのである。彼らは海岸近く
に住んでいただろう。水田稲作文明圏に暮らす人々である、生活を支える基幹の仕事はた
いてい水稲栽培のはずだ。行った先で生活するために、子供を含む家族ぐるみで移住する
つもりだ。海を渡ろうとするのだから、行ったあとのことも考えて、船を造ることのでき
る人が参加し、漁業にたずさわる人たちもいたはずだ……。海に近い集落に住んでいた
人々が思い浮かぶ。

ほかのすべては省略して鵜飼だけを考え、その集落に鵜飼もする人がいて、水路沿いに
住んでいると想像しよう。鵜飼をするときは、船で水路・川・沼を巡って魚を捕る。汽水
域でも鵜を潜らせ、凧なら海に出ることができる。江東の海辺はそういう地形の場所だ。
著書『鵜飼』にも電子情報網にも海で鵜飼をしたという記述はないが、長江の水系にある

大きな湖では鵜飼をしたはずで、わたしは、海でも鵜飼を試したことを疑わない。事実、著書『鵜飼』は、日本の野生の川鵜が日ごろは海に出て魚を食って暮らしていると書いてある。そちらの方に魚が多ければ自然なことである。電子情報網のサイト(二)に、カワウの潜水深度について一つのデータが示してある。その例では、平均深度十二メートル、最大深度三十メートルとある。海でも魚を捕る能力が十分にある。海で暮らすウミウなら、平均深度十五メートル、最大深度四十五メートルだそうだ。

五 渡海

海を渡るためには船が要る。中国大陸の古代の船は、先進の東地中海の船に比べれば発展が遅れたようだが、紀元前十世紀ともなれば中国にもかなり進んだ船があっただろう。残念ながら、ウィキペディアの「船」の項(三)は、今考えようとしている東シナ海の横断を具体的にイメージできるほどの情報を提供してくれない。わずかでも議論を進めるための参照例として、ずいぶん昔に太平洋の島々へ渡って行った人々のことを引き合いに出そう。有力な説によれば(四)、ポリネシア人の祖先は、オーストロネシア語族の民族で、もともと台湾あたりにいた集団が、紀元前三千年以前に台湾を出発して、紀元前二千年代に

はフィリピンからインドネシア諸島に達して、さらに、東南アジアから移動してきた人々などと混血しながら、紀元前一千四百年ころまでにニューギニア東部の島まで、そして紀元前一千二百年ころはるか東のポリネシアの島々に広がっていった、とされている。現代人が考えると驚くほどの昔だ。定説は、ポリネシアへ向かった人々が帆をもつ航行性能のよい船で大洋を航海したとする。当然、同じ時期の江南にも、東シナ海を超えることができる帆のある船があっただろう。青銅器がつけられ生産力の高まっていた紀元前十世紀の江東沿海地域なら、ポリネシア人の船ほど軽快でないとしても、大型化や構造化がある程度進んで荷物をかなり積める船があったとしてよいだろう。

船には、移住に必要な稲作文明の生活用具一式、当座の食糧、稲のモミなど栽培植物の種子と農具、漁のための漁具、豚・鶏・できたら牛…を積みこまなければならぬ。それらはみな、寧波郊外の紀元前四千年よりも以前の河姆渡遺跡で発見されている。たぶん複数の大家族が海に乗り出したのである。船の数と大きさによっては、積みこむ荷物の数を減らさざるをえなかっただろう。

船に積みこむのを忘れてならないのは鵜である。鵜は、移住地に着いて当座のあいだにも、動物性たんぱく質の魚をとってくれるはずだから、貴重な資源である。豚や鶏は繁殖

させなければならぬのですぐ食べてはいけない。もちろん、荷物はすべて、海に落ちないようにしっかりと船に固定されたはずだ。鵜飼の鵜も縄でつながれる。

さて出港は、海がおだやかで、到着したら種子を植えて作物の栽培を始められる季節が選ばれる。春の嵐がおさまるころは何月か経験によってある程度分かっていただろうか。航海の期間、人間は保存食を食べ、魚も釣って食べた可能性がある。豚や鶏にはエサをやる。鵜はどうするか。わたしは、下関から蘇州まで船で渡った経験がある。東シナ海の真ん中で海鳥を見た。東シナ海は大陸棚にあり、アジ・サバなどの比較的浅いところを回遊する魚がいる。大きい魚に追われて海面近くまで来ることもあるだろう。黒潮の流れる外洋でも、流木や海藻の下には小魚がいてそれを狙う魚もいるという。積んでいた鵜は船から離れないように縄でつないで、魚を捕らせることを試みたはずだ。うまくいけば、人間の食べる魚を捕ってくれただろう。縄でつなぐ鵜飼の値打ちが明らかにされ、航海するのに船に鵜飼の鵜を乗せる効用が明らかになった、と想像するのはいけないだろうか。

六 日本列島での鵜飼

中国大陸の江東沿海部を出発し、東シナ海を海流で北に流されながら東に進めば、九州

島の西・北岸のどこかが見えてくるだろう。陸地が見えだしたら、船からよい場所を探しながら進み、適当なところが見つかれば上陸する。上陸したとき大部分の荷物が無事に残っていれば移住は成功するだろう。種子を植えてそれらが育つまでは、手元に残っている食糧を食べ、漁をして魚を捕って、食いつなぐのである。到着した海辺で鵜飼を試したはずだ。荷物の多くが失われた場合には、先住の人々に助けを求めることになる。もし平和裏に受け入れてもらえればなんとかなるだろう。

移住は何度もあつて、定住に成功した人のなかから中国大陆にもどった人もあるだろう。必要な物資をもう一度運ぶという要求は強かつたはずだ。弥生時代について知られていることを勘案すれば、日本列島で稲作が広く行なわれ始めた紀元前八世紀までに、何度もかたりの人々が東シナ海を渡つたと考えられる。そういう往来によって杭州湾と九州島とのあいだに航路が開けたと考えられる。しかし、東シナ海の渡海は危険率が大きい。往来の楽な朝鮮半島へ物資を求めに行くことも多かつたはずだ。朝鮮半島から水稻栽培に適している九州島へ渡ってきた人々もあつたと考えられる。そもそも、それ以前の古い時代から、朝鮮半島南岸と九州北岸の人々のつながりは深く、生活用具をたずさえての往来が頻繁だったのだから。日本列島には、中国大陆と朝鮮半島の文化が流入したのである。

人間の移動について、ヒトのDNA解析による研究が進展している。『DNAで語る日本人起源論』(二)は、たとえば、水稲耕作をもたらした渡来系弥生人が、現代の天津付近の人たちと近縁性が濃く、朝鮮半島・中国の長江付近ともっと南部・台湾の人々ともかなりの近縁性をもつ、という結果を提示している。その後の「日本人」のDNA構成は、渡来して定着した人々と先住の人々との混血を進めながらの列島の東への拡散と、朝鮮半島や中国大陸からの引き続き移住によって決まったはずだ。しかし、文献(三)は、日本人の起源が複雑で簡単に割りきった議論をすることがむずかしいことを教える。

ここまで見てきたように、イネの品種のデータが中国大陸から直接伝来した水稲の存在を指示し、水稲栽培初期の土器付着炭化物の年代測定が弥生時代の開始を従来よりも五百年もさかのぼると指示したのだから、日本列島の古代について従来の説明とくに考古学的な編年を組みなおす必要があるだろう。ヒトのDNA解析の解釈にも影響を与えている可能性があるから、日本古代史の研究は、関連する分野を総合した方法によって整理し深化すべきなのだと思う。議論は今錯綜しているようだけれども、いずれその方向に進展するにちがいない。

話を鵜にもどそう。電子情報網上に、山口県土井ヶ浜に鵜を抱いた女性の遺骨があった

という書きこみがある。ウィキペディア「土井ヶ浜遺跡」(二)にも段落の見出しにそう書かれている。だがよく読むと、女性の胸部にあつたのは鳥の骨で、必ずしも鶺鴒と特定されているわけではない。そこには、その鳥を鶺鴒と考える理由らしきものとして、弥生時代の人々が鳥を神の国と人の世を仲立ちする使者と考え、また、鶺鴒が水田稲作を行なう集団にとって特別な鳥とみなされていたこと、そして、『記・紀』を引いて鶺鴒の羽は安産のための霊的な力をもつと考えられたことなどが記されている、

土井ヶ浜遺跡からは三百体以上の人骨が発掘された。埋葬の形式がほかの弥生時代の遺跡と共通し、人骨の形質が縄文時代人と異なることから、土井ヶ浜に暮らした人々は渡来人だと考えられている。そこは対馬海流を北へ押し上げる本州西北端部にあつて、その人たちの父祖は中国大陸から海流に乗ってここへ来たのではないかと想像させる。大陸から直接ではなかったとしても、そこよりも西に定着した人々が二次的に移住したと考えられる。朝鮮半島南岸・対馬・壱岐・九州北岸につらなる文化圏の一端に位置しているのである。DNAの解析が可能なら新たな情報が得られるかもしれない。

空想しているわたしは、土井ヶ浜の女性が抱いていたのは鶺鴒だという解釈に賛同する。鶺鴒の文化圏から来た渡来人は、日本列島で鶺鴒を飼っていたと考えてよい。古代人のアニミズムが鶺鴒を神聖視させたとすれば、単に鶺鴒を頻繁に見かけるからではなく、鶺鴒が彼らに

親しいものだったからにちがいない。鵜飼をしていれば生活の糧の一つともなり、そういう気持ちを抱かせるだろう。土井ヶ浜遺跡は海岸から三百メートルのところにある。そのあたりに鵜飼に適した淡水系はない。土井ヶ浜で人といっしょに鵜が葬られたのは、海での鵜飼を示唆しているのではないか。

『古事記』と『日本書紀』の神話で、山幸彦と玉依姫とのあいだに生まれた子は「ウガヤフキアエズのミコト」と呼ばれた。鵜の羽で産屋を葺くのが間にあわないうちに生まれたからという。山幸彦は兄の海幸彦にとって代わるのだし、玉依姫は海神の娘である。この神話は海辺で生まれたものだ。「ウガヤフキアエズ」の子が、九州から大和に侵入した「ワカミケヌ（イワレヒコ）」、後世つけられた名が神武である。日本国が成立したときの大和朝廷に鵜飼部が置かれたのは故なしとできない。その王朝は、社会の基盤に伝来した水稻栽培を置き、複合文化の一要素として鵜飼をもっていたのである。そして、出自においても。

鵜をたずさえて来た人々は、ほんとうの豊葦原に淡水系が広がる環境から、平地も大きな川も少なく流れの急な川の多い日本列島に来てみれば、鵜飼にあまり適さない環境に悩まされたことだろう。川鵜を使う鵜飼がすたれたことには理由があったはずだ。連れて来

た鶺鴒が少なくて繁殖がままならず絶えてしまったり、日本列島の川鶺鴒との交配がうまくいかなかったりしたのでらう。そこで、どこかの段階で、列島のどこでも見かける海鶺鴒を飼いならす努力が行なわれたと考えるのが自然である。しかし、著書『鶺鴒』に指摘されているように、渡り鳥の海鶺鴒は卵を産ませ繁殖させてヒナから育てることができないので、成鳥を捕らえて訓練する方法しかなかった。崖で眠る海鶺鴒が捕獲しやすい点は利点だったらう。ヒナを人の近くで育てよくなつかせる場合と異なり、捕らえた成鳥は縄でつないで人になれさせることから始めなければならぬ。今日の日本の鶺鴒は、こういう初期の条件に由来すると考えれば理解可能である。

鶺鴒をした水系としてわたしが想像しているのは、主に海と汽水域である。鶺鴒をしてもそこなら魚影が大きく減ることはない。島国のその環境なら、鶺鴒にエサを自分で捕らせ、生業のあいまになんとか鶺鴒をすることができるとして、海で鶺鴒をするなら、海の波になれて潜水能力も高い海鶺鴒を使う方が理に適っている。これも、日本列島で鶺鴒の鶺鴒が海鶺鴒になった一因ではないだろうか。

鶺鴒は、漁法としては漁網を使う漁業にかなわない。海辺で鶺鴒をしていたとしても、時代とともに海陸の生産能力が高まれば、それはすたれていったらう。結局、愛着をもつ熟練した少数の人たちだけが細々と鶺鴒をするようになる。他方で、伝統の鶺鴒の文化

を捨てきれない人がいて、朝廷に鵜飼部が置かれたのだろう。そういう支援をうけた長良川などの鵜飼が、技術の存続を助けたと考えられる。

鵜飼は、ちょうど鮎のように、海から汽水に入り川に帰った……。

エピローグ

ここまで、鵜飼が中国大陸と日本列島で独立に発明されたのではないという立場から思索を進めてきた。ところが、電子情報網には、南米大陸北西部のペルーで鵜飼を示すらしい絵柄の土器が発見されたことが記載されている(23)。鵜は首に縄をむすばれていて、土器は千四百年前ころのものという。鵜飼の独立発生説を支持する一つの物証である。古代のペルー人は、飼いならして人のために魚を捕らせるに至るほど発明さをもちあわせていたのだろうか。

これにいくらか疑問を呈することができるぐらいに、北米の研究者が、古代の南米大陸北西部と東アジアもしくは日本列島とのあいだに交流があったとする主張をしているようだ。文献(24)によれば、エクアドルで発掘された古代の土器が日本の古代の土器と関係すると主張する研究がある。この方向に舵をとってどこまでも進めば、土器の鵜飼らしい

絵柄は、東アジアからの伝聞、あるいは鶺鴒そのものの伝来を示す、という主張に至るだろう。現実にポリネシア人の太平洋上の島々への渡航があり、また、近代以来筏や手漕ぎボートでの実験的な航海が行なわれていて、古代に太平洋を横断した可能性の研究は魅力的である。しかし現在の研究水準で、古代ペルーに鶺鴒があつたとし、さらにその由来を議論するのはむずかしい。潜水能力を超えて深入りすることを避けよう。

思索を続ければ、稲作の伝播についても多くの興味深い問題がある。よく知られているように、マダガスカル在先住民は、先述のオーストロネシア語族に属し、インドネシア諸島のボルネオあたりを出て、最終的にインド洋の果てにあるそこに移住したのである。その人々はマダガスカル島に稲作をもちこんでいる。

ところで、日本語の源流に関して、古代日本語の屈指の研究者だった大野晋が興味深い説を唱えている(二)。インド半島南端のタミル語が日本語の起源だといっているのである。多くの共通する単語があり、文法の「かかりむすび」を共有するという。丸谷才一などが共感を示したほかは、古語辞典でお世話になったほとんどすべての人たちがこの説を無視している。しかし、その言葉を話す人々がインド南部から日本列島へ来たと解釈するから突飛なのである。ボルネオの稲作民のマダガスカルへの移住を参照して、稲作発祥の中国大陸

南端から東南アジアの海岸を経由して、言葉がひどく変化しないうちにインド南部に到達した稲作民がいたと考えれば、彼らと中国大陸南端から北上して江東地域へ達した稲作民とが、共通する単語や「かかりむすび」の文法をもっていたとしても不思議ではない。そして、ほぼ確実にその江東から日本列島へ移住して稲作文化を広めた人々がいたのである。こう考えれば、大野晋説を検討もせず切り捨てることはできない、ある中心部から伝播した言葉や文化が周縁部に残存するのはしばしば見られる現象なのだから。よく話題になる日本と中国雲南省の文化の類似も、この観点から見直されるべきだろう。

されば、いととほき国のことのはの、こなたによう似たるこそめづらしけれ。

補節 稲作と鵜飼の西進

第四節では水稲栽培の江東地域への北上を海岸ルートで考えたけれども、珠江と長江を対比して内陸部の地図を見ると、二つの水系の分水嶺をなす山地から南北に流れて珠江側と長江側に向かう川沿いに水田耕作地帯が繋がっている。すなわち、湖南省と江西省を北上する二つのルートがあったと考えられる。このルートでも長沙または南昌に出ると、

海岸ルートの場合のように、七・八月以外は気温が下がる。水稲がその環境への適応を終えれば、長江上流の重慶から下流までの気温もおおよそ似ているので、長江流域への伝播は容易だったろう。だが、この補節の目的は、水稲栽培の西進を考えることにある。

珠江中流域から西南に進み境界をなす山脈を越えれば、現代のヴェトナム北部、ハノイを中心とする地域に出る。紅河のつくったこの堆積平野は、珠江河口域（広州）の平野に勝る。ハノイの気温を南寧と比べると、平均最高・最低気温が五月と十月に高いが、おおよそ似ている。すなわち、珠江中流域から紅河河口域にモミをたずさえて移動した稲作民は、生育条件で大きな困難に出会わなかっただろう。拡大地図を見ればここは多くの湖沼をもち、水田耕作の最適地だったはずだ。水稲栽培が普及していった初期、広州からハノイ一帯が稲作文明の最も発展した地域だったと推定できる。後世漢の武帝がこれらの地域に郡を設置したのは、古くから発展し貢租をとりたてる魅力のある土地だったからだ。

それに対して、文献⑤によつて、従来水稲栽培種の有力な起源候補地とされてきた中国雲南省はその地位を失う。栽培イネは、以前に想定されたように雲南から東や南へ伝播したのではなく、地形からすると、紅河河口域（または珠江中流域から河をさかのぼって行つたと考えられる。その場合、雲南省の南端では気温が高いものの、北へ行くとしだいに

高地になり、従来起源地と想定された地域付近の昆明まで行くと、平均最高気温が二十五度を超えず平均最低気温も十七度を超えない。生育条件を左右する温度差が大きすぎて、栽培イネが雲南の高地まで行くには長い年数がかかっただろう。

さて、ここまで触れなかったが、水稻栽培種の起源地を珠江中流域と特定した文献③は、もう二つ重要な結論を得ている。最初の栽培イネがジャボニカであることと、もう一種のインディカがジャボニカと東南アジアやインドの野生系統との交配で生まれた、というものである。

前段で考えたように、栽培イネは珠江中流域から南西に山を越えて紅河河口域に出て、そこから東南アジアとインドへ伝播していったのである。その場合、東南アジア北部は、今日でも常緑広葉樹林に覆いつくされた山地なので、栽培イネをもちこんで開墾するには労力を要するから、インドの東北部に至った人々は南に迂回しながら進んだ可能性が高い。そのルートの途次または別のルートを通して、南流する三つの大河の流れるラオス・カンボジア・タイ・ミャンマーの平地に達し、水田耕作の適地を見つけた人々がいただろう。もう一つ、現代のヴェトナムの海岸沿いに南下するルートを加えなければならない。いずれにしても、東南アジアを南進した栽培イネは、常夏の熱帯気候に適応しなければならな

かった。そこで、道程の初めのころ、ジャポニカはハイブリッド作戦をとってインディカに変身する必要があった。つまり、栽培イネは現地の野生イネと交配して、高温に耐える性質を獲得したのである。自然交配でも、高温耐性の獲得に長い年月を必要としなかった可能性が高い。

すると、インド東北部まで来た稲作民が、わりあい早い時期に生まれたインディカをたずさえて、ベンガル湾沿いを足早にインド半島南端部まで達した可能性は十分ある。インド半島の歴史は、北方から侵入したアーリア人が南に広がり、北部の王朝がガンジス川流域とさらに半島中部まで支配する歴史だったので、その地域では初期の稲作民の文化は大きく変更されたことだろう。それに対して、北部の王朝に最後まで支配されることのなかった半島南端部には、古代に伝来した稲作文化を保存する条件があった。だから、大野晋の仮説を修正して、タミル地域に、伝来した稲作文化にまつわる古い言葉や文末に強調を示す音(語)を追加する習慣が残った、と仮定できるかもしれない。

鶉飼のことも考えてみよう。著書『鶉飼』には鶉飼がヴェトナムやインドに分布していたと書かれている。同様の記述が電子情報網にあるが、それらはこの著書に依拠しているように見受けられる。そこでわたしは、東南アジアとインドで鶉飼の行われていることを

インターネットで確認しようとした。ところが、日本と中国以外の国で、鵜飼という言葉を見つけたことはできなかつた。英語の鵜飼をキーワードにしてやつと見つけることができたのは、カンボジア政府の文書の一つに鵜の助けで魚を捕るという文と、バングラディッシュでカワウソを鵜飼のように使うという記事だけだつた。ヴェトナムでも見つからず、インドではかつてアッサムやベンガルである種の鵜に魚を捕らせたという記事に行き当たつただけである。

今も外国人観光客を引き寄せる鵜飼の一つが雲南にある。珠江流域が漢に併合されて以後中国の一部になつたのに対し、紅河流域は併合後も独自性が強く、ヴェトナムは後世独立し、雲南は隋・唐・宋の時代に別の国を構成したが元(モンゴル)に再征服されたのである。その雲南の鵜飼は、日本のそれとむすびつけられて、広葉樹林文化論で文化複合の一つの要素に数えられている。しかし上で議論したように、水稻栽培が、ずいぶん古く日本列島でいう縄文時代前期に別の地域で始まり、雲南へは河をさかのぼつて南東から来たとすれば、文化の流れも南東から来たと考えるのが自然である。鵜飼も、次の段落で述べるように、紅河河口域(または珠江中流域)から河をさかのぼつて来たとする見方の方に分がある。日本と雲南の文化の類似は、伝播の中心域がもつていた文化が波及地に残した痕跡、とする見地が成り立つ。広葉樹林文化論は組み立てなおしが必要になるだろう。

鵜飼は、二次的な伝播を例外として、広大な長江水系、珠江水系、紅河水系、そして、東南アジアのほかの水系やインド半島北東部の水系で行なわれた。これらのどこで鵜飼が始まったか完全には特定できない。だが、鵜飼が伝播したものなら、地理的中心に位置する珠江水系から北と西南に広がっていったとするのが最も単純で理解しやすいシナリオである。このシナリオは、珠江水系が、水稲栽培の始まったところで、鵜の飼育の始まった地域にも属しており、第三節で考えた鵜飼発明の契機に最もふさわしく、さらに、水田耕作が伝播していった形跡とよく調和するので、最も蓋然性が高い。

思索を巡らせてここまで浮遊して来てみれば、ガンジス川河口域でカワウソを縄でつないで魚を捕らせる「鵜飼」は、極東の島国で同じく縄でつないだ海鵜に川で鮎を捕らせる鵜飼図と対照をなして、いっそう興味をそそる。人間はなんと発明な生き物だろう。

文献

力不足のため文献を十分挙げる事ができない。よく知られた歴史的事項についての文献は省略し、ここで議論の材料にした事項の出典を分かるかぎり挙げる。

- (1) ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/鶺鴒>。
- (2) 可児弘明、『鶺鴒』、中公新書、1966年。
- (3) ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/稲作>。
- (4) www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/0725, 国立歴史民俗博物館, 2003年。
- (5) www.initiative.soken.ac.jp/journal_bunka/050509/thesis_fujio.pdf, 藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘, 「弥生時代の開始年代」, 総合研究大学院大学 文化科学研究創刊号, 2005年。
- (6) 倉田のり、久保貴彦, <http://first.lifescienceb.jp/archives/6065>, 2012。
元の論文は、Xuehui Huang et al., A map of rice genome variation reveals the origin of cultivated rice, *Nature*, 490, 497-501 (2012)。
- (7) ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/ニワトリ>。
- (8) 国土地理院 ナショナルアトラス閲覧サービスから, http://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atl-as-d_2i_07.pdf。

- (9) ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/チワン族>.
- (10) http://akaitori-tobitiro.jp/simpleVC_20101031125822.html.
- (11) ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/船>.
- (12) ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/ポリネシア人>.
- (13) 篠田謙一、『日本人起源論』、岩波書店、2015年。
- (14) ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/土井ヶ浜遺跡>。
- (15) 電子情報網上に鶴飼の描かれた土器の写真がある。情報源の一つは中日新聞、2008年6月6日の記事。
- (16) CL. ライリー他、『倭人も太平洋を渡った』、創世記、1977年。
- (17) 大野晋、『日本語の起源』、1956年；『日本語の源流を求めて』、2007年、いずれも岩波新書。

幕が下りたあとのナレーション

：鵜は大海を渡る筏の上にいる自分を夢見ている。筏に命綱を結びつけて海に潜り魚を捕る。もし、その筏に食糧と土器を持つ人間も乗っていて、土器にたまった雨水を自分に飲ませてくれたら、自分の捕った魚をその人に分けてやってもよい……